

保健活動リレーエッセイ

“まちの健康支えます！”

益城町 保健師 姫野晶子

“自分の健康は自分で守る” そんな住民を増やしていきたい

「国保くまもとの保健活動リレーエッセイの執筆をお願いします」。

市町村保健師協議会上益城地区理事からの突然の電話。「内容は国保連合会のホームページをご覧ください」との言葉に、困惑しながらものぞいてみると、広報誌「国保くまもと」がWEB版になっていること、その中に保健活動の紹介コーナーがあることを知り、“びっくりポン”でした。IT系が苦手な私はどうも縁遠くなってしまいます。

そんな私が町のデータヘルス計画策定に関わることになり、概要版作成に当たり、町での課題を見つけるために総論や学習会の資料等を何度も読み返しました。どんな視点で見ていくといいのか考えながら、先進地の事例等も参考に何度も何度も作成しましたが、課題が見えてきませんでした。町の課題が見つかるデータは何なのか、データを洗い直し見ていくと、やっと扉が開いたかのように課題が見えてきました。

本町の最も大きい課題は、医療機関受診率は高いのに、特定健診の受診率が県下 47 保険者中 36 位と低いことです。特に若い働き盛りの年代では、医療機関受診率も健診受診率も低い状況です。

ちょうど4年くらい前になりますが、子育てをされていた頃に健診などで顔見知りだった母親が、必死な形相で国保の窓口に来られていました。「どうされたのですか」と声を掛けたら、「相談があります」という返事だったのですが、気付いた時には姿はありませんでした。私も「相談がある」という言葉が気になり、何度か電話をかけ、やっと窓口来所時を利用して話をすることができました。夫が急に入院し手術することになったというのです。「健診は受けていたの」と聞くと「病院嫌いだし、働かないとお金が入ってこないの、受けてない」との返事。貯蓄がなく借金もあるため入院費も払えない、子どもの学費の未納で進級も危ない、入学の制服の準備もできない、孫が生まれ世話もしなければならぬ、夫が仕事を続けていけるかなど、彼女にはたくさんの問題が降り掛かっていました。彼女自身も優秀な成績を挙げ働いていたのに半年前には自殺を考えるような病気になり、今は仕事を辞めているとのことでした。その後、関係機関につないでいったのですが、国保加入者の中には、このような暮らしをしている人がどれくらいいらっしゃるのだろうかと考えようになりました。

「健康より毎日の暮らしを支えるほうが大事」。そう言わざるを得ない場合もあるでしょう。私たちは、そのような人にこそ、健診を受けてほしい。そして受けやすい健診の機会を提供していかなければいけません。

本町では、20歳から特定健診の健診項目を500円のワンコインで受けられます。受診後のフォロー体制を強化して、「自分の健康は自分で守る」住民を増やしていきたいと思えます。



健康づくり推進課の保健師・栄養士・歯科衛生士の皆さん

次号執筆者は宇土市の伊藤順子保健師の予定です。